

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 5 月 16 日現在

機関番号：15301

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2010～2013

課題番号：22520469

研究課題名(和文) 日本語における文法化の共時的側面に関する研究

研究課題名(英文) A study of synchronic side of grammaticalization in Japanese

研究代表者

宮崎 和人 (MIYAZAKI, Kazuhito)

岡山大学・社会文化科学研究科・教授

研究者番号：20209886

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,400,000円、(間接経費) 720,000円

研究成果の概要(和文)：本研究課題では、文法化(grammaticalization)の共時的側面に関する研究の一環として、現代日本語の認識的モダリティーや客観的モダリティーが、言語の実際的使用のなかで、テンスや時間的限定性といった時間的なカテゴリーやテキスト構造と相互作用しながら、どのように文法化を進めているかについて考察した。

研究成果の概要(英文)：In this study, as part of a study of synchronic side of grammaticalization, I investigated how epistemic modality and objective modality had been grammaticalized in contemporary Japanese, focusing my concentration on interacting with temporal categories (i.e., tense and temporal localization) and textual structure in pragmatic use of language.

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：言語学・日本語学

キーワード：文法化 モダリティー テンス 時間的限定性 テキスト 可能

1. 研究開始当初の背景

モダリティーを 発話時における話し手の心的態度 あるいは 主観性 と規定し、客観的な事柄内容である 命題 との異質性を強調する議論を軸として、日本語のモダリティーの研究は発展してきた。その成果には目を見張るものがあるが、命題とモダリティーを相互排他的な関係でとらえ、テンスを命題の要素としてモダリティーから切り離してしまったことには大きな問題がある。テンスは、現実世界の出来事の確認のしかたである認識的ムードと一体であって、スル・シタは、非過去・過去のテンス形式であると同時に、叙述法・断定のムード形式でもある。テンスとムードは、ともに文の対象的内容と現実とのかわりである 陳述性 (predicativity) を表現すべく、言語に発達したカテゴリーであって、これらは、意味的にも歴史的にも、きわめて密接な関係をもち、本来は、切り離して論じることができない。さらに、運動、状態、特性、質といった 時間的限定性 の違いによる文の対象的内容のタイプは、アスペクト・テンス・ムードの分化の土台であり、文のモーダルな意味と相互規定的な関係にある。共時論的な文法研究では、文法的カテゴリーの純粋性や切断性を前提とし、文法を均整のとれた安定的な体系と見なして研究が進められることが多いが、こうした見方は仮構であり、共時態と通時態の峻別も不可能である。共時論的な文法記述においても、形態論化の程度といった見方や連続性仮説を全面的に取り入れた考察が求められている。そのためには、内省による研究には限界があり、大量の使用例にもとづく実態の調査が不可欠となる。

2. 研究の目的

本研究の目的は、文法化の観点を取り入れることによって、従来とは違った方法で、現代日本語の文法記述を行うことにある。文法化の観点を取り入れるとは、文法的カテゴリーの純粋性・切断性を前提とすることや文法を均整のとれた安定的な体系と見なすことを否定し、連続性仮説にもとづく考察を、大量の使用例にもとづいて行うということの意味する。主な考察対象は、認識的モダリティーと客観的モダリティーであり、前者については、テキストタイプとの関係を踏まえたテンスとの相関性やテキスト構造との相関性を考察し、後者については、可能表現の文におけるレアリティーと時間的限定性・テンポラリティーとの相関性について考察する。

3. 研究の方法

本研究では、一般言語学や類型論的な枠組みにもとづき、形態論的カテゴリーであるアスペクト・テンス・ムードと、構文論的カテゴリーであるアスペクチュアリティー・テン

ポラリティー・モダリティーを区別する立場をとる。また、文法化を、個別要素の変化ではなく、カテゴリー化とみる。文法的カテゴリーの純粋性・切断性を疑い、連続性仮説を採用する。

文法構造は、言語の実際的使用の中で形成され、発展していく。文法化の進行状況を客観的に評価するために、大量の実際の使用例にもとづく一般化を行う。頻度も重視する。文法構造が言語活動に規定されることを踏まえ、考察においては、はなしあい かり 等のテキストタイプを厳密に区別する。

4. 研究成果

本研究では、主に、(1)類型論から見た現代日本語の認識的モダリティー、(2)認識的モダリティーとテンポラリティーの相関性および認識的モダリティーのテンス形式、(3)認識的モダリティーのテキスト的機能、(4) 可能 をめぐってのレアリティー・テンポラリティー・時間的限定性の相関、の4つのテーマについて考察し、以下のような成果を得た。

(1) 現代日本語の認識的モダリティーは、文法化のどのような段階にあると評価できるかについて、パーマーの類型論的研究や工藤真由美の日本語のMTA体系に関する研究を参照しつつ、以下のような結論を得た。類型論的に見て、モダリティーの意味的なタイプには、命題の真偽あるいは事実性に対する話し手の態度にかかわる命題的モダリティー (propositional modality) があり、命題的モダリティーには、命題の事実性に対する話し手の判断を表す認識的モダリティー (epistemic modality) と命題の事実性に対する証拠を表す証拠的モダリティー (evidential modality) の2つの主要なタイプがある。また、モダリティーの表現手段には、ムード(動詞の語形)とモーダル・システム(助動詞類)がある。日本語の動詞は、ムード・テンス・アスペクトの観点から形態論化を進めていて、ムードに関しては、叙述法(スル)と実行法(シロ・シヨウ)に分化し、叙述法は、テンスの観点から過去形(スル)と非過去形(シタ)に、認識的ムードの観点から断定形(スル)と推量形(スルダロウ)に分化している。推量形は、古代語のムード形式「せむ」から「しよう」ができたのとは別に、「せむ」の一用法である「にてあらむ」が縮約されて「だろう」となり、助動詞として述語と組み合わせるようになったものである。工藤真由美が指摘するように、断定形と推量形の対立は、認識的な側面(直接確認か間接確認か)から伝達のしかた(新情報か共有情報か)の側面にも及んでいる。以上は、「だろう」の、認識的ムードの形式の構成要素としての側面であるが、「だろう」は、認識的モダリティーのもう1つの表現手

段である、モーダル・システムのメンバーという側面をもつ。現代日本語のモーダル・システムは、認識的モダリティーと証拠的モダリティーの両方にかかわる。また、認識的モダリティーには証拠的な側面も見られる。まず、「かもしれない」と「にちがいない」は、認識的モダリティーであり、結論の確かさ（認識論的な可能性と必然性）を区別する。次に、「だろう」と「らしい」も認識的モダリティーであり、知識・経験にもとづく判断（推量）と観察にもとづく判断（推定）を区別する。この区別は、証拠性(evidentiality)の違いともいえる（「かもしれない」「にちがいない」についても証拠性の観点から見る必要があるが、これについては後述する）。さらに、「ようだ」「みたいだ」と「そうだ」は、証拠的モダリティーであり、知覚的証拠と言語的証拠（伝聞）を区別する。認識的モダリティーと証拠的モダリティーの間には移行現象が見られ、その例として、「らしい」の伝聞用法、「ようだ」「みたいだ」の推定用法がある。

(2) 従来の文法研究では、命題とモダリティーの相互排他性や文法的カテゴリーの自立性が前提となっているが、工藤真由美の「らしい」「ようだ」の研究で示唆されたように、認識的モダリティー（ここではパーマーの命題的モダリティーをさす）の研究には、文の対象的内容やテンポラリティーとの相関性といった視点が不可欠である。本研究では、認識的モダリティーとテンポラリティーの相関性に焦点をあて、認識的モダリティーと事象（動詞）のテンポラリティーの相関性および認識的モダリティーのテンス形式の現れ方について考察した。前者については、一部の例外を除いて従来ほとんど言及がなく、後者については、すでに多くの言及があるものの、過去形になるかならないかという形式面のみが注目され、テキストのなかでの機能（過去形と非過去形の対立）という視点がないため、事実を正確に記述できていない。本研究では、小説・シナリオを対象とした調査を行い、以下のような結論を得た。まず、認識的モダリティーのタイプは、事象（動詞）のテンポラリティーと次のように相関する。日本語の認識的モダリティーの形式を証拠性の観点から眺めた場合、(A) 知識・経験にもとづく推論を表す「だろう」「かもしれない」「にちがいない」と(B) 知覚や言語的証拠（にもとづく推論）を表す「らしい」「ようだ」「みたいだ」「そうだ」とに大きく分類できる。調査の結果、(A)の形式は、未来の事象を対象的内容とする傾向が強く（過去であれば反事実傾向）、(B)の形式は、過去・現在の事象を対象的内容とする傾向が強いことが明らかになった。このような基本的な事実を確認したうえで、なお次のような点も重要である。1つは、認識的モダリティーと事象のテンスの関係には、論理的な

態度が大きく関与するということである。すなわち、(A)の形式であっても、「のだろう」のような説明の形式をとったときは、過去の事象を対象的内容とする傾向が強まる。原因を求めておしはかるというテキスト内での機能がそうさせるのである。もう1つは、「にちがいない」の位置づけについてである。「にちがいない」は、(A)の形式のなかでも、未来の事象である例が少なく、過去の事象の例が多い。つまり、相対的に(B)に近い性質をもつのである。一方、認識的モダリティーのテンス形式についての調査結果は、以下の通りである。まず、認識的モダリティーは、発話行為の場へのアクチュアルな関係づけのある会話文においては、発話時の認識を表すことが基本的であり、その限りにおいて、過去形での使用は見られない。ただし、「ようだ」については、過去の知覚体験の発話時における確認を表す過去形の使用が見られる。一方、地の文では、非過去形が作中人物の内的独白や語り手のコメントといったテキスト部分に現れ、会話の場合と同様に、(内的)発話時における認識を表すが、過去形は、作中人物の内的思考の対象化や説明のかたりから記述のかたりへの転換という文体的技巧として使用される。このような過去形の使用は、(A)の形式よりも(B)の形式に多く見られる。そして、ここでも、「にちがいない」の過去形の使用率が(A)の形式のなかで最も高いことが注目される。なお、伝聞の「そうだ」は、特殊であって、地の文での使用がほとんどなく、使用は語り手のコメント部分に限られている。

(3) 従来の認識的モダリティーの研究は、テキストタイプとの相関が視野になかっただけでなく、テキストのなかでの機能という視点もなかった。奥田靖雄がおしはかりの文といいきりの文に生じる認識的な意味の移行をおしはかりの構造（先行する文にえがかれている出来事を根拠におしはかる想像・思考の過程）との関係で論じているのは数少ない例外である。本研究では、まず、「だろう」ともなう文、「のだろう」ともなう文、「らしい」ともなう文が、地の文のテキストにおいて、それぞれ、おしはかりの構造、おしはかりの構造と説明の構造、らしさの構造と説明の構造をつくりだすことを確認し、「のだろう」においては、逆の過程であるおしはかりの構造と説明の構造とが1つにもつれあっているのに対して、「らしい」では、らしさかららしさをもたらしているものをおしはかるというらしさの構造が原因・結果のような法則的なむすびつきをとりだすという側面において説明の構造とかさなりあうという関係で2つの構造が統一されていることを指摘した。さらに、「にちがいない」ともなう文を観察すると、「だろう」と同じく、おしはかりの構造のみを成立させ

ている例がみられるが、それは一部にすぎない。動詞述語が過去形の場合では、多くの例がおしはかりの構造と同時に説明の構造のなかにあらわれている。そのなかには、らしさの構造のなかにあるとみてよいものもある。つまり、「らしい」に近い位置にあるとみられる「にちがいない」が存在するのである。「にちがいない」が「らしい」に近づくのは、理由のないことではない。パーマーによると、英語の MUST には認識的必然性と観察からの推論の意味が共存している。しかし、説明の構造のなかにある「にちがいない」と置き換えられるのは、多くの場合、「らしい」よりも「のだろう」である。つまり、「にちがいない」は、おしはかりの構造のみにあられる場合と、おしはかりの構造と同時に説明の構造のなかにあられる場合とがある。後者の場合、「だろう」であれば「のだろう」という説明のかたちが要求されるのに対して、「のにちがいない」というかたちはあるものの、実際の使用は少数であり、「にちがいない」が説明として機能する。名詞述語文もまた、その対象的意味が本質的な特徴を明らかにするという側面において説明の概念とかさなりあうために「のだ」ともなうことなく説明として機能するということが佐藤里美によって指摘されているが、「にちがいない」の場合では、認識的必然性というモダリティーが説明の形式として機能しているのである。さらに、今回の調査から、「にちがいない」をともなう文がおしはかりの構造を構成せず、説明の構造のみを成立させている場合のあることが明らかになった。この場合、「のだろう」に置き換えることができず、説明であることを明示しようとすれば「にちがいないのだ」となる。この場合、「にちがいない」をともなう文は、し手の行動、判断の根拠となる判断、感情の源泉となる判断をさしだしている。

(4) 従来の日本語のモダリティーの研究では、モダリティーを心的態度や主観性と規定し、客観的な事柄内容である命題との異質性を強調する議論が展開されてきた。その成果には目を見張るものがあるが、このアプローチによって、時間的なカテゴリーとの相関性という、モダリティーの重要な性質が見逃されてきたのも事実である。また、日本語学では可能がモダリティーとして扱われないという特異な状況がある。本研究では、これらの問題を指摘したうえで、可能表現の文（「することができる」および可能動詞を述語とする文）のレアリティー（可能・実現の可能性・実現）とテンポラリティーおよび時間的限定性との相関性をめぐって展開される奥田靖雄の議論を追跡し、これを踏まえて、「することもありうる」を述語とする文のレアリティーに関する調査を行い、結論として、

奥田の指摘する、「することができる」におけるポテンシャル化の方向とは逆に、「することもありうる」では、ポテンシャルな可能からアクチュアルな可能へ移行し、さらに認識的可能性へ移行しつつあることを指摘した。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計5件)

宮崎和人、〔書評〕Heiko Narrog 著 “Modality in Japanese: The Layered Structure of the Clause and Hierarchies of Functional Categories”、日本語の研究、査読有、第7巻3号、2011、pp.79-85

宮崎和人、認識的モダリティーとテンスの相関性 小説の調査から、日本研究、査読有、第51号、2012、pp.27-47

宮崎和人、《推量》と《説明》 テクストにおける「にちがいない」をともなう文の機能、岡山大学大学院社会文化科学研究科紀要、査読無、第35号、2013、pp.23-38

宮崎和人、モダリティーとしての可能レアリティーと時間的な意味とのからみあい、岡山大学文学部紀要、査読無、第59号、2013、pp.87-98

宮崎和人、書評論文 村木新次郎著『日本語の品詞体系とその周辺』、日本語文法、査読有、14巻1号、2014、pp.131-141

〔学会発表〕(計1件)

宮崎和人、日本語のモダリティーと時間性、韓国外語大学日本研究所国際学術シンポジウム「言語類型論と個別言語研究 TAMシステムを中心に」、2011年8月19日、韓国外語大学

〔図書〕(計2件)

澤田治美編、ひつじ書房、ひつじ意味論講座第4巻 モダリティ：事例研究、2012、pp.101-120

日本語文法学会編、大修館書店、日本語文法事典、印刷中

6. 研究組織

(1) 研究代表者

宮崎 和人 (MIYAZAKI, Kazuhito)
岡山大学・大学院社会文化科学研究科・教授
研究者番号：20209886